色や形などを手掛かりに想像を働かせ、作品を多様な見方や感じ方で味わうことができる児童の育成
－視点を意識することを柱とした鑑賞活動を通して－

図画工作・美術班　町田　和弘（小学校教諭）

課題「鑑賞する時のポイントが身に付いていない」

鑑賞は苦手・・・

作品のよいところなどを言葉にするのが難しい・・・

作品の見方が分からない・・・

見出した視点
⇒「鑑賞ポイント」

鑑賞したことをもとに、視点を「鑑賞ポイント」として意識付ける

実践1　「アートレポーターになって」（俵屋宗達作　風神雷神図屏風の鑑賞）

（題材の内容）「風神雷神図屏風」を見て、気付いたことなどを書き出し、グループで共有する。その上で、風神、雷神のいずれかの解説をアートレポーターとなって書き、発表し合う。

気付いたことなどを整理して付けた見出しを、「鑑賞ポイント」という鑑賞の視点として意識付ける工夫

「鑑賞ポイント」を見出す活動の流れ

①付箋紙に表した気付いたことなどをグループ内で発表し合い、似た内容で整理して見出しを付ける。

②見出しを「鑑賞ポイント」として全体で共有する。

持ち物　ポーズ　様子　色　など

こんな風に見るんだ！

児童のレポート文から

・筋肉質な腕は、今にもこちらに伸びてきそうです！　ポーズ

・顔は、まるで動物のようです。　様子

・あのようなおかしなたいこのバチで、どうやってたいこを鳴らしたのでしょうか？　持ち物

新たな鑑賞ポイント
⇒周りとの関係

積み上げてきた「鑑賞ポイント」や、新たな「鑑賞ポイント」を意識しながら鑑賞させる

実践2　「なんだ？ワンだ！」（伊藤若冲作　百犬図の鑑賞）

（題材の内容）鑑賞ポイントを意識しながら「百犬図」を見て、犬のせりふを考える。さらに新たな鑑賞ポイントである「周りとの関係」を意識しながら犬のせりふを考え、それを隣同士で説明し合う。

これまで積み上げてきた「鑑賞ポイント」や新たな「鑑賞ポイント」を意識させる工夫

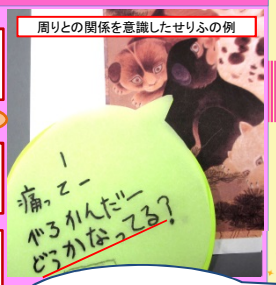
①書いたせりふが、どの鑑賞ポイントに当てはまるのかを考える。

ポーズ　表情　周りとの関係

②「周りとの関係」を意識し、改めてせりふを考える。

③隣同士で、せりふやそのせりふにした根拠を説明し合う。

周りとの関係を意識したせりふの例



見方が分かってきた！

①で「ポーズ」「表情」など鑑賞ポイントを意識したせりふを書いた児童
→22人中、22人（全員）

そのうち「周りとの関係」を意識してせりふを書いていた児童
→22人中、11人

②で改めて「周りとの関係」を意識したせりふを書いた児童
→22人中、22人（全員）

成果

○鑑賞ポイントの提示と説明、ペアやグループ・学級全体での共有、個別指導での鑑賞ポイントの確認を繰り返すことで鑑賞ポイントが蓄積され、自然に視点を意識しながら作品を鑑賞できるようになった。

○鑑賞ポイントを自分で選択して鑑賞させるとともに、作品から何を捉えたのか、作品のどこから捉えたのかを意識させることで、多様な視点で作品を見て色や形などを手掛かりに作品を味わうことができるようになってきた。

課題

○作品にじっくり向かい合う時間が足りず、表面的な読み取りになってしまう部分も多かった。時間の設定や鑑賞ポイントの提示や確認の仕方を工夫することが必要であると考えられる。